

# 吉田正己教授送別の辞

樋口 哲也

東邦大学医学部皮膚科学講座（佐倉）准教授

吉田正己教授は平成 25 年 3 月 31 日をもちまして東邦大学医学部皮膚科学講座（佐倉）を定年退職されました。

先生は昭和 50 年に東邦大学医学部を卒業後、同年、東京医科歯科大学皮膚科学教室に入局、皮膚科学の研鑽を開始し昭和 52 年には助手になられました。昭和 56 年には専門医を取得後、翌 57 年からは近畿大学へ講師として就任、この間ライフワークとなるウイルス性皮膚疾患の研究を開始、医学博士の学位を取得されました。温厚な先生のお人柄を考えると、生活ベースの異なる関西での生活は気苦労があったことは想像に難くありませんが、平成 13 年からは母校である東邦大学皮膚科学第 1 講座に助教授として着任されました。東邦大学着任後、当時の第 1 講座の研究室の設立・運営を屋台骨として支えつつ、ご自身のウイルスの研究にも没頭されました。なかでも loop-mediated isothermal amplification (LAMP) 法を用いたヒトパルボウイルス B19 感染症の迅速診断法の確立や、活性化酸素による表皮細胞からの神経成長因子の産生に関しての *in vitro* での研究などで大学院生の指導を行いました。医師として研究者としてまた指導者として第 1 講座の医局運営に尽力された後、平成 17 年に開院 14 年目にして初代の東邦大学医学部皮膚科学研究室（佐倉）教授に就任されました。佐倉病院教授就任後も、人材の確保・育成と新しく教室を作っていくという大きなミッションに邁進され、現在の佐倉病院皮膚科は近隣・千葉県内の中でも充実したスタッフで高度な診療を提供できる施設に成長しました。このように忙しい毎日診療の合間にも、ウイルス性疾患の興味深い症例を発見すると嬉々として自らピペットマンを動かして検体の採取やアッセイを行い、ウイルスの小さな世界をわれわれ医局員に目に見えるかのように解説してくださいました。

また、ウイルスや遺伝子という西洋医学の先端の研究と

は対照的に、先生は東洋医学・漢方療法にも造詣が深く、臨床を研鑽され日本東洋医学会専門医・指導医の資格を取られました。平成 20 年に佐倉病院に漢方外来が新たに開設された際には、漢方科の診療部長として、その設立から運営まで尽力されました。欧州から確立し発展する近代皮膚科学と、古くから伝わる東洋医学の両方の知識で疾患・症例に対応しておられ、その温厚な性格も合わせて、先生の元には多くの患者さんが集まってきました。残念ながらご多忙な先生の毎日の診療の中で、われわれ医局員が皮膚科領域の漢方医療を系統的・継続的に指導していただく時間はなかったものの、診療や運営などの業務から少し離れた後は、改めて先生の膨大な知識を教授いただける時間ができるのではないかと期待しています。また退職後も、漢方薬の薬効についての研究を続けていくとのことで、研究者としての医師の在り方・進む道をわれわれに示してくださいました。

われわれが佐倉病院でご指導いただいた間、先生はほとんど有給休暇を消化せず診療されておりました。これは着任前の大森病院での勤務の時期から続いていたとのことで、さらに先生は退職に近づいても常用薬もなくお元気に過ごされています。飄々とした先生のどこにそんなエネルギーがあるのか、われわれ医局員は常に感嘆の思いでおりましたが、やはりその源は皮膚科学に対する熱意であると今になって感じる事がようやくできました。われわれ佐倉病院皮膚科医局員のミッションは、先生が立ち上げられた教室をこのままの勢いで発展させていくことです。今後ともご指導を賜りたく存じますが、まずはいったん小休止してご健康に留意してお過ごしください。長い間の東邦大学での勤務、お疲れ様でした。ご指導いただきどうもありがとうございました。